

## 時枝誠記の言語過程説とB.F.スキナーの言語行動論<sup>注1</sup>

佐藤方哉

Motoki Tokieda's language as a process theory and  
B. F. Skinner's theory of verbal behavior

SATO, Masaya

### Abstract

The present author compared Motoki Tokieda's language as a process theory with B. F. Skinner's theory of verbal behavior. He found five similarities and four differences between Tokieda's theory and Skinner's theory. The five similarities: (1) Both Tokieda's definition and Skinner's definition of behavior are broad. (2) According to both Tokieda and Skinner, language is not the system of signs but behavior of individuals. (3) Tokieda's concept of *ji* and Skinner's concept of autoclitic are remarkably similar. (4) Both Tokieda and Skinner took account of multiple causation of verbal behavior. (5) Both Tokieda and Skinner considered that neither a word nor a sentence has meaning without situational context. In other words, words or sentences have no meaning without actual use. Four differences: (1) Tokieda considered both expression behavior and understanding behavior to be language behavior. Whereas, Skinner considered only expression behavior to be verbal behavior. (2) Tokieda did not define language behavior formally. Therefore, he did not clarify the fundamental difference between language behavior and other behaviors. Whereas, Skinner defined verbal behavior clearly and showed the crucial difference between verbal behavior and other behaviors. (3) According to Tokieda, language is acquired by association. Whereas, according to Skinner, verbal behavior is shaped, maintained, and modified by contingencies of reinforcement. (4) Tokieda considered that linguistically same language behavior is always also behaviorally same language behavior. Whereas, Skinner considered that linguistically same verbal behavior might be behaviorally different behaviors.

本稿の目的は、国語学者である時枝誠記（1900－1967）の提唱した言語過程説とよばれる言語観を、アメリカの行動主義心理学者B.F.Skinner（1904-1990）の言語行動論と関連づけて考察することにある。

時枝誠記は、1941年に出版した『国語学原論』において言語過程説を提唱し、1955年の『国語学原論 続編』においてそれを発展させた。時枝によればその概要は以下の通りである（時枝,1955,pp.3-4. 原文の縦書きを横書きに、旧仮名遣いを新仮名遣いに、本字を略字に、和数字をアラビア数字に変更.）。

- (1) 言語は、思想の表現であり、また、理解である。思想の表現過程及び理解過程そのものが、言語である。
- (2) 言語が、思想の表現、理解であると云つても、すべての表現理解が、言語であるのではない。絵画や音楽も、思想の表現理解である。言語は、音声（発音行為）或いは文字（記載行為）を媒介とする表現行為である。同時に、音声（聴取行為）或いは文字（読字行為）を媒介とする理解過程である。
- (3) 言語は、従って、人間の行為、活動、生活の一に属する。言語を行為する主体を言語主体と名づけるならば、言語は、言語主体の実践的行為、活動としてのみ成立する。このことは、具体的には。言語は。個人においてのみ成立することを意味する。
- (4) 言語は、表現の場合には、理解主体（聞手、読手）を予想し、理解の場合には、表現主体（話手、書手）を前提とする行為である。独白は、話手が同時に聞手となる特別の場合である。
- (5) 言語行為が成立するためには、必ず、ついて語られる何もの（素材、話題の事柄）かが、必要である。言語において、話手、聞手、素材を、言語の成立条件という。
- (6) 言語行為は、その媒介が、音声であるか、文字であるかに従って、「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」の四の形態のいずれかにおいて成立する。第4項の事実を、考慮に加えるならば、「話すこと」は、「聞くこと」を予想し、「書くこと」は、「読むこと」を前提とし、また、それぞれに、その逆である。
- (7) 言語は、そのいずれの形態においても、言語主体の実践的行為であるから、表現には、表現の技術を、理解には、理解の技術を不可欠とする。
- (8) 言語を行為し、実践する立場を、主体的立場といい、言語を観察し研究する立場を、観察的立場というならば、言語を研究するということは、言語を行為し実践する主体的立場を観察することに他ならない。

時枝は、言語を記号の体系とみなすFerdinand de Saussureをはじめ多くの言語学者、国語学者の見解を言語構成観と名づけそれを退けて、言語を行為の一つとみなす見解を言語過程観と名づけ、それに基づく言語過程説を提唱したわけである。

一方、B.F.Skinnerは、記号の体系としての言語 (language) ではなく個人の行動としての言語行動 (verbal behavior) を対象とした言語研究が必要であるとして“*Verbal behavior*”を上梓した (Skinner,1957)。この書物において、Skinnerは言語行動を、「同じ言語共同体に属する他の成員のオペラント行動を介した強化によって形成・維持されているオペラント行動。そして、他の成員による強化をもたらすオペラント行動は、その言語共同体特有の強化随伴性のもとでオペラント条件づけされたものである」と定義し、このように定義された言語行動を規定する制御変数の分析を試みた<sup>注2</sup>。

時枝は行為という語を用い、Skinnerはbehavior (行動) という語を用いているが<sup>注3</sup>、両者の見解には相通じるものがあり、時枝の理論が、画期的な言語理論とみられるSkinnerの理論に先行しているところからも注目に値する。

## 1

時枝の見解とSkinnerの見解とでは、少なくとも以下の5点が類似している。

**1. 時枝の行為の定義も、Skinnerのbehaviorの定義も、単に立ち居振る舞いだけでなく幅広いものである。**

時枝は、「…行為というのは、例えば、歩行すること、飲食すること、遊戯すること等の意志的な身体運動は、勿論のこと、見ること、聞くこと、味わうこと等の感覚作用、また、判断、計画、想像等の思考作用も含めて云うのである。… (時枝,1955,pp.12-13. 原文の縦書きを横書きに、旧仮名遣いを新仮名遣いに、本字を略字に変更。以下の引用も同様。)」と述べている。

Skinnerは、behaviorを「個体の営みのうちで外的環境に働きかけ、あるいは相互交渉をもつすべての営み (Skinner,1938)」と定義している。外的環境に働きかけ、あるいは相互交渉をもつすべての営みということは、一言で述べるならば生の営みということに他ならない。

時枝は、先に引用した文に続いて「…人間の一切の行為は、その根本において、生の営みであることにおいて、これを生活と呼ぶことが出来る。(時枝,1955,p.13.)」と書いている。時枝とSkinnerの行為ないし行動についての見解は、このように類似している。

**2. 時枝の研究対象も、Skinnerの研究対象も、記号の体系としての言語ではなく、個人の行為ないし行動としての言語ないし言語行動である。**

1916年に出版されたSaussureの“*Cours de linguistique generale*”は1928年に小林英夫により

『言語学原論』として邦訳され、わが国の国語学界、言語学界に大きなインパクトを与えた。しかし、時枝は、Saussureの言語研究の対象はラングであるという見解に異を唱えた。彼は、言語は記号の体系であるとするSaussureを含む多くの言語学者の考えを言語構造観と名づけ、これに対して、言語を行為の一種であるとする自らの考えを言語過程観と名づけ、それに基づく言語過程説を提唱したわけである。

時枝の言語過程説の骨子は、言語は人々が共有する構造的体系ではなく、個人の行為ないし行動であるという点であり、この考えはSkinnerのものでもある。Skinnerによれば、言語行動(verbal behavior)は個人の行動の一種であり、言語(language)は言語共同体が共有する言語行動から抽象された構造的体系である。人々は言語を使用するのではなく、言語行動を自発するのである。したがって、言語は言語行動の材料ではない。このことは、時枝の「…「語る」については、「語られるもの」が存在しなければならないと考え、このような「語る」活動の材料となるものとして言語を考えることは、具体的経験を出発点としようとする私に於いては承認することが出来ない。それは素朴な実在論に過ぎないのである。(時枝,1941,p.13)」や、「…言語的表現行為に当たって、かかる行為によって使用せられる材料としての言語(ソシュール学派の所謂ラングの如きもの)が、主体を外にして存在するが如く考えることは、比喩的にのみいうことが許されることである。言語は主体を離れては絶対に存在することの出来ぬものである。(時枝, p.23)」という言葉にもはっきりと示されている。

時枝およびSkinnerのユニークさを浮き彫りにするために、言語研究の対象をどのように考えるかについて、時枝、Skinner,現代言語学の祖といわれるSaussure、そして現代言語学の大御所とされるN.Chomskyを比較しておこう(表1)。

表1 言語研究の対象は何か?  
(括弧内は言語研究の対象ではない)

	時枝	Skinner	Saussure	Chomsky
心の中の何か	-	-	langue ラング	language competence 言語能力
社会における何か	-	(language) (言語)	-	-
個人の行動	言語	verbal behavior 言語行動	(parole) (パロール)	(language performance) (言語運用)

3. 時枝も、Skinnerも、言語行為ないし言語行動における二つのレベルないし段階を区別している。

時枝によれば、語には、概念化する過程を経て表現される「詞」と、概念化する過程を経ずに言語主体の立場を直接表現する「辞」の二種類がある。詞に属するものは名詞、動詞、形容詞、連体詞、副詞などであり、辞に属するものは、助詞、助動詞、感動詞、接続詞、陳述副詞などである。直接、時枝の言葉を引いてみよう。

構成的言語観に於いては、概念と音声の結合として、その中に全く差異を認めることの出来ない単語も、言語過程説に立つならば、その過程的形式の中に重要な差異を認めることが出来る。即ち、

- 一 概念過程を含む形式
- 二 概念過程を含まぬ形式

一は、表現の素材を、一旦客体化し、概念化してこれを音声によって表現するのであって、「山」「川」「犬」「走る」等がこれであり、又主観的な感情の如きものをも客体化し、概念化するならば、「嬉し」「悲し」「喜ぶ」「怒る」等と表すことが出来る。これらの語を私は仮に概念語と名付けるが、古くは詞といわれたものであって、鈴木朗はこれを、「事物をさしあらわしたものである」と説明した。これらの概念語は、思想内容中の客体界を専ら表現するものである。二は、観念内容の概念化されない、客体化されない直接的な表現である。「否定」「うち消し」等の語は、概念過程を経て表現されたものであるが、「ず」「じ」は直接的表現であって、観念内容をさし表したのではない。同様に、「推量」「推しはかる」に対して「む」、「疑問」「疑い」に対して「や」「か」等は皆直接的表現の語である。私はこれを観念語と名付けたが、古くは辞と呼ばれ、鈴木朗はこれを心の声であると説明している。それは客体界に対する主体的なものを表現するものである、助詞助動詞感動詞の如きがこれに入る。右の概念語観念語の名称は、私が右の分類法を試みた当初に用いたものであるが、種々誤解を招き易いので、古くから日本に於いて行われて来た詞及び辞の名称を借用して今後これを用いることにしたいと思う。(時枝,1941,pp.231-232.)

詞は、「シ」「ことば」と呼ばれ、語の分類に於いては辞に対立するものであり、その一般の性質は、大体次のように要約することが出来る。

- 一 表現される事物、事柄の客観的概念的表現である。
- 二 主体に対立する客観化の表現である。
- 三 主観的な感情、情緒でも、これを客体的に、概念的に表現することによって詞になる。
- 四 常に辞と結合して具体的な思想表現となる。
- 五 辞によって統一される客体的表現であるから、文に於ける詞は、常に秩序である

「格」を持つ。(時枝,1950,pp.65-66)

辞は、「ジ」「てには」「てにをは」と呼ばれ、語の二大別の一にして、詞に対立するものである。語の構造上から云えば、概念過程を経ないところの表現で、その一般的性質は、大体次のように要約することが出来る。

- (一) 表現される事柄に対する話手の立場の表現である。
  - (二) 話手の立場の直接的表現であるから、つねに話手に関することしか表現出来ない。
  - (三) 辞の表現には、必ず詞の表現が予想され、詞と辞の結合によって、始めて具体的な思想の表現となる。
  - (四) 辞は格を示すことはあっても、それ自身格を構成し、文の成分となることはない。
- (時枝,1950,pp.161-162)

一方、Skinner (1957) は、マンド・タクト・イントラバーバル・エコーイックなどの一次性言語オペラントと、それらに付加される二次性言語オペラントとしてのオートクリティック (autoclitic) というものを区別する。オートクリティックとは、自分の言語行動とその制御変数からなる出来事が制御変数である言語行動で、記述的オートクリティック、質限定的オートクリティック、量限定的オートクリティック、関係的オートクリティック、要求的オートクリティック、推蔽的オートクリティックがある (杉山・島宗・佐藤・マロット・マロット,1998,pp.284-287)。

時枝の詞と Skinner の一次性言語オペラント、時枝の辞と Skinner のオートクリティックはいずれも同一ではないが、かなり類似している。時枝の詞も Skinner の一次性言語オペラントもそれだけを用いることができるが (一語文の場合など)、時枝の辞も Skinner のオートクリティックもそれだけで用いられることはなく、詞あるいは一次性言語オペラントに付加されるのである。

時枝の区別は語についてであるが Skinner の区別は語ではなく言語オペラントについてである点は異なるが、Skinner の記述的オートクリティック (「…だそうです」「かもしれません」等) と質限定的オートクリティック (断言や否定) は時枝の辞ということができる。

**4. 時枝も、Skinner も言語行為ないし言語行動の、Skinner のいう多重因果 (multiple causation) を重視している。**

Skinner のいう多重因果とは、ある行動を制御する変数が複数存在しえ、また、ある変数が複数の行動を制御しうることである。

時枝が多重因果を重視していたことを明示するものとして、彼の敬語論がある。時枝は、(1) 言語の素材の表現 (詞) に現れた敬語法、と (2) 言語の主體的表現 (辞) に現れた敬語法を

区別する。そして、前者をさらに(1-イ)話手と素材との関係により規定される敬語法、と(1-ロ)素材と素材との関係によって規定される敬語法に二分する(時枝,1941)。換言すれば、(1-イ)は、話題中に登場するものへの尊敬表現、(1-ロ)は、話題中に登場する何者かとはかの何者かとのあいだの上下関係を示す表現、そして(2)は、聞き手への直接の敬意表現である(萩野、2001、2002<sup>注4</sup>)。(1-イ)にはいわゆる尊敬語、(1-ロ)には謙讓語、そして(2)には丁寧語が用いられる。(時枝は、尊敬語、謙讓語、丁寧語といった用語は用いていない。)例えば、ある女性がその伯父に「昨日、姉が伯母さまに花を差し上げたそうでございますね」といったとすれば、「伯母さま」が(1-イ)、「差しあげた」が(1-ロ)、そして「ございます」が(2)である。このように、日本語の敬語においては、(1)話し手と話題中の人物との関係、(2)話題中の二者の関係、そして(3)話し手と聞き手との関係(Skinnerの理論ではオーディエンス・コントロール)の三者が敬語の発話を制御しているわけである。

Skinnerは、多重因果の例としてさまざまなものを挙げているが、著名な例として、Shakespeareの“Golden lads and girls all must, as chimney sweepers come to dust.”における“dust”は、(1)この句のテーマである「死」による主題的制御、(2)“chimney sweepers”によるイントラバーバル的制御、そして(3)“must”によるエコーイック的制御の三者により制御されているというものがある。

5. 時枝も、Skinnerも、単語および文は、それが人によって実際に行わないし行動として用いられてはじめて意味をもつのであって、それ自体単独では意味をになてはいないとする。

時枝は次のように述べている。

若し意味というものを、音声によって喚起せられる内容的なものと考える限り、それは言語研究の埒外である。しかしながら、意味はその様な内容的な素材的なものではなくして、素材に対する言語主体の把握の仕方であると私は考える。言語は、写真が物をそのまま写す様に、素材をそのまま表現するのではなく、素材に対する言語主体の把握の仕方を表現し、それによって聴手に素材を喚起させようとするのである。絵画の表そうとする処のものも同様に素材そのものではなく、素材に対する画家の把握の仕方である。意味に本質は、実にこれらの素材に対する把握の仕方即ち客体に対する主体の意味作用そのものでなければならないのである(時枝,1941,pp.404-405)。

時枝は、山に遊んで昼食を取ろうとして傍らの石を指して「このテーブルの上で食べましょう」という例と、疲れた山道で一本の木の枝を折って「いい杖が出来た」という例を挙げている(時枝,1941,p.405)。

一方、Skinnerの言語行動論からは、「今日はとても暑いですね」という発言も、その制御変数によって意味がさまざまになる。主要な制御変数が確立操作であるならば、「冷たいものを頂けませんか」とか「冷房をいれて下さい」といったマンドの意味であるし、ただ暑いという事実が弁別刺激であるならば文字通りのタクトであろう。

時枝もSkinnerも、意味を実体としてではなく機能として捉えているのである。

## 2

時枝の見解とSkinnerの見解とでは、少なくとも以下の4点が異なっている。これらの相違は、いずれもSkinnerの行動理論の理論的枠組である行動随伴性<sup>注5</sup>という概念が時枝にはなかったことによっているといえよう。

**1. 時枝は表現行為も理解行為も言語行為であるとしたが、Skinnerは表現行為のみを言語行動とした。**

言語の表現行動と理解行動は行動随伴性が異なるので、Skinnerの立場からは同一に扱うべきではない。

**2. 時枝は言語行為をフォーマルには定義しなかったので、言語行為と他の行為との相違が明白ではない。一方、Skinnerは言語行動をフォーマルに定義したので他の行動との相違が明白である。**

Skinnerによる「同じ言語共同体に属する他の成員のオペラント行動を介した強化によって形成・維持されているオペラント行動。そして、他の成員による強化をもたらすオペラント行動は、その言語共同体特有の強化随伴性のもとでオペラント条件づけされたものである」という言語行動の定義は、行動随伴性という概念なしでは不可能である。この定義により、言語行動は付加的随伴性（杉山・他,1998）により形成・維持・変容される行動として他の行動との相違が明らかにされる。

**3. 時枝によれば、言語は連合により獲得される。一方、Skinnerによれば、言語行動は付加的行動随伴性により形成、維持、変容される。**

時枝は、Skinnerについては全く何の知識もなかったであろうから、オペラント条件づけや、行動随伴性といった概念を取り入れていないのは当然である。彼が、もしも生前にSkinnerの見解について知ることができたならば、大いに共鳴し影響を受けたことであろう。

**4. 時枝にとっては、形式的に同一の言語行為は常に同一の言語行為である。一方、Skinner**



にとっては、形式的に同一の言語行動が常に同一の言語行動とはいえない。

Skinnerの言語行動論では、同じ「水」という発話でも、制御変数が水の確立操作であればマンド（要求言語行動）であり、制御変数が実際の水という弁別刺激であればタクト（報告言語行動）であり、制御変数が「ミズ」という音声的弁別刺激であればエコーイック（音声模倣行動）であり、制御変数が“water”という言語的弁別刺激であればイントラバーバル（言語間制御）であるというように、その制御変数が異なれば異なる言語行動である。

∞

時枝は、国語学史を研究することにより本居宣長、富士谷成章、鈴木朗などの著作から多くを学び（時枝,1940）、西欧的な言語構造観ではなく、独自の言語過程観に達し言語過程説を打ち立てた（時枝,1973）。

一方、Skinnerは、従来の欧米における言語研究に飽き足らず、自らの言語行動論を世に問うた（Skinner,1957）。そこでSkinnerは自らの理論を新しい定式化（a new formulation）と記している（Skinner,1957,p.10）。Skinner自身は、自分の仕事のうちで後世もっとも高く評価されるものがこの書であろうと多くの人々に語り、私もそれを、直接、耳にした一人であるが、現在までのところ行動分析学者以外にはほとんど無視されている。しかし、私にもこの書は20世紀に出版された書物のうちでもたぐいまれなものであるように思われる。西欧の伝統的言語観からはあまりにもかけ離れているため多くの人々にはその真価がみえないのであろう。著名なChomsky（1959）の書評もまったく的外れであることに気づく者は少ない。

Skinnerの思想は、非常にアメリカ的なプラグマティズムであると同時に、仏教的な面が強い（佐藤,1990,1994,1995）。その意味で、源に日本の伝統的国語学をもつ時枝の言語過程説との間に類似性が認められるのも当然かもしれない。我々はSkinnerの言語行動論に先立って時枝の言語過程説のあることにあらためて目を向け、もちろん独立ではあるが、その発展ともみられるSkinnerの言語行動論の重要性に気づくべきであろう。

注1：本稿は佐藤（2003）およびSato（2004）を発展させたものである。

注2：Skinnerの言語行動論の詳細については佐藤（2001）を参照されたい。

注3：中国語ではbehaviorを行為と訳す。

注4：萩野（2001, 2002）は、時枝の敬語論の一般人への紹介として優れている。

注5：Skinner自身は強化随伴性とよぶが、強化だけではなく弱化的（罰）や消去の場合もあるので行動随伴性とよぶのが適切と思われる（杉山・他,1998）。

## 引用文献

- Chomsky,N.(1959). Review of B.F.Skinner, *Verbal Behavior*. *Language*, 35. 26-58.
- 萩野貞樹 (2001). *みなさんこれが敬語ですよ*. 東京:リヨン社.
- 萩野貞樹 (2002). *敬語のイロハ教えます*. 東京:リヨン社.
- 佐藤方哉 (1990). 自覚せざる仏教徒としてのスキナー—随伴性とは縁である. *行動分析学研究*,5,107.
- Sato,M.(1994,May). *Buddhism and radical behaviorism*. In Symposium Peyrot,M. (Chair),“Radical behaviorism and Oriental connection” at 20<sup>th</sup> Annual Convention of Association for Behavior Analysis. Atlanta.
- Sato,M.(1995,May). *Dogen and Skinner*. In Symposium Hernandez-Pozo, R.(Chair),“Behavior analysis and Zen” at 21<sup>st</sup> Annual Convention of Association for Behavior Analysis. Washington,D.C..
- 佐藤方哉 (2001). 言語への行動分析的アプローチ. 浅野俊夫・山本淳一(共編) *ことばと行動—言語の基礎から臨床まで—*. 東京:ブレーン出版,pp.3-22.
- 佐藤方哉 (2003). スキナーの言語行動論と時枝の言語過程説. *日本行動分析学会第21回年次大会発表論文集*,77. 岡山:岡山大学.
- Sato,M. (2004,May). *Tokieda's language process theory and Skinner's theory of verbal behavior*. Paper at the 30th Annual Convention of the Association for Behavior Analysis, Boston.
- Skinner,B.F. (1957). *Verbal behavior*. New York, NY: Appleton-Century-Crofts.
- 杉山尚子・島宗理・佐藤方哉・リチャード W. マロット・マリア E. マロット (1998). *行動分析学入門*. 東京:産業図書.
- 時枝誠記 (1940). *国語学史*. 東京:岩波書店.
- 時枝誠記 (1941). *国語学原論*. 東京:岩波書店.
- 時枝誠記 (1950). *日本文法 口語篇*. 東京:岩波書店.
- 時枝誠記 (1955). *国語学原論 続編*. 東京:岩波書店.
- 時枝誠記 (1973). *言語本質論*. 東京:岩波書店